

1 3. 車返しの弥陀



1. むか〜し むかしのことだ…、

国中のいろんところで侍 どうしの争いがあるな、戦は源氏と平氏とに分かれての一大決戦となった。

そしてついにな、源氏の源頼朝が勝利して鎌倉幕府を開いたんだ。

この話は、ちょうどそのころのことなんだ。

奥州（東北地方） 一帯に勢力を張った藤原氏三代目の藤原秀衡は源頼朝と張り合うくらいの力があつた。

なぜ秀衡が、そんなに強い力を持っていたかというとな、運慶という有名な仏師がつくった『弥陀三尊』の仏像を、守り本尊として日夜拝んでいたご利益だと言われていたんだ。



2. この話を聞いた源頼朝は、どうしてもその弥陀三尊が欲しくなつてな、「そんなにありがたい仏像ならば、ぜひ手に入れてご利益にあやかりたいもんじゃない」

と、言つて秀衡に何度も使いを送つては、譲るよふにと命じたのだ。

ところが秀衡は

「大切な家宝の仏様だ。將軍頼朝の命令でも手放すことはできない・・・」と、頭を抱えていたんだ。

「断つたら何か仕返しがあるかもしれない。因縁をつけられて攻めてこられても困る・・・」と、悩んだあげく仕方なく仏像を渡すことに決めたんだ。

秀衡は一族を集めて、弥陀三尊を贈るための儀式を執り行つた。

そして、仏様を立派な厨子に納めて牛車に乗せて、「よいか、道中はくれぐれも注意して無事に頼朝公へ届けるのだぞ」

こうして、おもだった家来十名ほどを警護につけて、鎌倉へ向けて出発させたのである。





3. それにしても、奥州からは、それはそれは遠くて長い道のりだ。
登り下りの険しい山道もあれば、雨の日もあってぬかるんだ道
に難儀したこともあった。

家来たちは、大事な仏像を無事に届けられるか、いつ鎌倉へ
到着できるのか、と大変心配であった。

こうして、いくつもの困難を乗り越えて、鎌倉街道筋の府中村
まで来た時のことだ。



「やれやれ、苦労した山道も通り抜けて、けが人もなく、よく
府中村まで来られたもんじゃの！」

「おうおう、無事にここまで来られたのも阿弥陀様のおかげか
なあ。有難い事じゃ。」



4. 家来たちは、喜び合い汗をふきふき一息ついて、

「さあーて、もうひと踏ん張りじゃー！」と、牛にひとムチ
気合を入れて、さあ出発だあと引き始めた。

ところがどうしたことか急に牛車が動かなくなってしまった。

「うんん〜、それ〜ひけ！ そおれえー」前に押してもダメ。
後ろに引いても動かない。

「なんだ、なんだ？ 一步も動かないぞ〜」

「そんなことがあるもんか！ 車輪を確かめよ！」

「どこも壊れた様子はありませんねっ！」

家来たちが力を込めて動かそうとするが、やっぱり一步も動か
ないのだ。



5. この行列を、畑仕事をしながら物珍しそうに見ていた農民た
ちは、何事が起きたかと、ひそひそと話し始めた。

「えらく立派な厨子が乗っているが、中身はなんじゃろうか？」

「わしらも手伝った方がええんじゃねえか？」

「いやー、わしらがやたらに手を出したらいけねえべえ」



6. 警護頭は首をかしげて思い悩んでいたが、しばらくすると納得したかのように大きくなつくと、

「こうも車が動かないのは、きっと、阿弥陀様が鎌倉へ行きたくないと思っているからではなかろうかぁ…」と、ひとり言のようにつぶやいた。

すると、ひげを蓄えた家来の一人が、頭の言葉に応えるように大きな声で言った。

「おお、まっこと、そのとおりかもしれませんなァ」

「うむ、そうだ、きっとそうにちがいない！」

「そうだ そうだ」と、家来たちの大きな声が続いた。

警護頭は、ともかくこのことを、鎌倉の頼朝公に使いを出して知らせることにした。



7. 阿弥陀仏の到着を今かと待ち焦がれていた頼朝公は使いの者から事の次第を聞いて、

「何！・・・、本当か？」

「何としても動かないということか？ 阿弥陀様は！」

「鎌倉へ来ることを望まれていない、ということなのか？」

頼朝公は、使いの侍たちに語気を荒げて、

「おい！ お前たちもそう思うのか？」

「はは～！」と、使いの侍たちはひれ伏した。

頼朝公は、

「そうかそうか、あい解った！ 阿弥陀様がそのように思われているのでは仕方がないのう！」

「ならば、そのまま奥州へ引き返すがよいぞ！

ごくろうであった！」



8. 頼朝公が阿弥陀様を諦めたことを知った家来たちは、皆、顔を見合わせて胸をなでおろした。

早速、車の向きを奥州の方角へ返すと、なんと！なんと！ 不思議なことに車は軽々と動くではないか！

「やっぱりそうだったのか！」

阿弥陀様は鎌倉へは行きたくなかったのじゃ！

ほんとに不思議なことじゃ！」

「しかし、それにしてもなァ、やっとたどり着いた府中村から引き返すのだからなァ。何とも不思議なことよのう」

この日はこの府中村にとどまり、

あくる朝早く奥州へ向けて帰ることに決めた。

さて、

ここから舞台は大きく変わるぞ！



9. 阿弥陀仏が奥州へ戻ろうとするちょうどそのころにな、一人の若い旅の僧が、堀之内村の小さなお堂で座禅を組んで修行を続けていた。

とある夜のこと、若い僧は不思議な夢を見た。お堂の中が急にまぶしいほどの光が広がって明るくなり、その中に阿弥陀様が現れて、僧にこう告げたのだ。

「わたしは今、府中の車返しの村にいる、永くおまえの禅室に住もうと思うから迎えに来て欲しい、頼んだぞ」と、言って、すーと消えてしまった。

夢から覚めた僧は「不思議な夢じゃのう・・・」と、首をかしげながら、このことがどうしても夢のこととは思えなくてなあ、夜の明けるのも待たず、早速、府中の車返し村を訪ねていくことにしたのだ。



10. 夜が明けるころ、ようやく府中村へ着くことができた。だが、村人に尋ねても誰も車返しの村を知る者がいないのだ。僧はすっかり困ってしまった。その時、通りかかった老人が、「いやあ、車返しという名の村は聞いたことがねえなあ・・・」「なんだかなあ、牛者がどうしたことか、ここからまた奥州へ引き返すという話は聞いたぞ」

「そうですか、それではその牛車はもう引き返してしまいましたか？」と、尋ねると、

「いや、牛車と侍たちはまだ村の宿に居るようだぞ」

「そうでしたか・・・」「夢ではなかった！」と、手を合わせながら早速その宿へ行き、家来たちに夢の話告げた。



11. すると、

「なんと！ また、阿弥陀様のお告げがあったというわけか・・・」家来たちは、二度にわたるこの不思議なできごとに驚いて、ともかく、早馬で奥州へ使いを出して秀衡の命令を待つことにしたのだ。

「そうか！…。これもまたあの阿弥陀様のお導きであろうか」「ここは、みなの方の幸せのために阿弥陀様のお告げを受けとめようぞ。よいぞ…その僧に弥陀三尊を託すがよいぞ」

「阿弥陀様は、戦のない世を望まれているに違いない・・・」



「そして… 静かな武蔵の堀之内村におってな、きっと平穩な世へと導いてくれるのであろうぞ…」と、大きくうなずいた。



12. 阿弥陀様は若い僧と家来とに見守られながら、堀之内村にあるお堂へと運ばれていった。

家来たちは、お堂をきれいに清めてから、弥陀三尊を一体ずつ丁寧に納めた。

そして、若い僧の唱えるお経が小さなお堂に、静かにながれるなか、家来たちは大そう嬉しそうに奥州へ帰って行った。

それから毎日、若い僧は昼夜となくお経をあげて阿弥陀様を大切にお守りしたということだ。

そのお堂はな、まもなく来迎寺という立派なお寺になってな、ずーと弥陀三尊を祀っているのだよ。



13. それからな、車返しの村という地名はな、夢の中で阿弥陀様がおっしゃられた村の名前じゃったのだよ。

そして、この夢の話を知った人々はだれともなく弥陀三尊を『車返しの弥陀』と呼ぶようになったということじゃ。

この阿弥陀様は、世の中から戦や争いごとを無くしてくれる有難い仏様だ。

と、いう噂も広まって、

遠くからお詣りにくる人々があとを絶たなかったということじゃ。

おしまい